

哲學研究

第四百六十二號

第四十卷
第四冊

ὁμοιογενέως τῇ φύσει ζῆν

——ストアの自然と自由——

鹿野 治 助

われわれは自然の中に生れ、自然の中に呼吸しているわけであるが、同時にまた歴史的環境の中に生活しているわけでもある。歴史的環境といつてももととはいえば、自然に順應して生じ、自然から與えられたものと考えられる。しかし人間的なものが進むと、いつの間にか自然から遊離し、矛盾し、謀叛さえするように思われる。他の動物をよくいうわけではないが、彼らの生活はそのままが自然の生活であり、彼らの生命の通りが宇宙の生命であり、神という言葉を用いるならば、神と直結しているのではないかと思われる。然るに人間に於いては不知不識のうちに生命が二つになり、宇宙のリズムとわれわれのリズムとは食い違つてしまつたかのである。それではこのようなことはどこから起つたかというに、クリスト教では人間が智慧の木の實を食つてからであるし、またギリシア的にいえば、プロメーテウスが神々から火を盗んで人間に與えてからである。またプロテーィーノスの言葉でいえば人間が生成界に一步踏み出して、自分を自分として他と區別し、自主自由を悦んでそれを亂用するようになってからである。つま

り分別的な智慧によつて歴史が始まり、いわば人間の無限の世界が始まつたのである。動物に於いては例えば蜂や蜘蛛は實に巧みに巢をつくるけれども、それは種族的な本能によるのであつて、ジェネレーションが自然的に繰返すだけである。そこには一種の完結があつて進歩も發展もない。しかし人間に於いては個人的な知によつて築いたことは次の人によつて受繼がれ、更に前進させられる。人間に於いて始めて歴史が始まり、或意味に於いて完結のない世界が始まつたのである。また人間の分別的な智慧によつて自他の區別がつき、主觀客觀の對立が生じたのである。動物に於いてはその差別がなく、動物はその都度その對象になり切つてゐる。然るに人間に於いては、自分は自分、他は他として嚴然たる區別がついた。そこに純粹に見るとか觀察するということが起り、そしてそのために客觀の法則とか理法が看取されて科學が發達したと考えられる。技術と來ては正に人間獨特のものである。それは模倣ではなくして一種の創造なのである。今日の通信機關や交通機關の如きものは、自然のままでは幾年待たうと生じはしない。技術は科學や歴史と結んで、今日のような驚異すべきものを産み出したのである。この故に自然のままでは何よりも弱い人間でありながら、動物の最も強きものよりも強く、最も速いものよりも速く、何れの點でも他の總てにまさる結果となつた。またわれわれはそれらの機械、技術、文化施設によつて多大の便宜を得てゐるわけである。しかし翻つて他方から見れば、人間の創造はいかに素晴らしいからといつて、無から創造することが出来るわけではない。それはいつも自然の何かを材料として借りてつくるのであり、また動力自身も自然の力や働きを借りてゐるのである。いわば自然のものを盗み、自然の法則を奪ひ取つて、それを利用したに過ぎないのである。プラトーンのシュンポシオン篇によると、人間はもと四本足四本手の、丁度もう一人の人間を背中合せにしたような人間であつた。それでその故に非常に強力で、神の領域を侵したり、亂暴したりして大變神々を困らせた。それで神々が色々相談した結果、今日の人間のように二本手二本足の人間にしたのである。このようなミュータス的ないい方をする、今日の人間程神の領域を侵略してゐる時代はなかつたのではないかと思われる。人間は神の秘密をさぐつて、その不思議な火を盗み

とつて、それを逆用さえしているのである。従つてその罪は一本手一本足にされるどころか、全人類が正に焼き殺されることに値するのかも知れない。人間は自然に叛いているばかりでなく、人間自身が自分のつくつたものに叛かれていますのである。いわば復讐されているのである。然しだからといつて、今更プリミティブな生活に戻すことも出来ない。一度動き出した歴史の車輪は矢張その方向への廻轉をやめないであらうし、また科學や技術はその領域に於いて更に進展してやまぬであらう。諸學問も文化も、益々進歩するに違いない。しかしそれで歴史は進歩し、人の世は進んだのであらうか。進歩とは一體何なのか。大げさないい方をして恐縮だが、ソークラテース式にいえば、これらの文化施設も要するところガラクタ物に外ならないのではないか。ストアのポセイドーニオスによれば、文化の發展に伴つて倫理や宗教は平行して進んでいない、寧ろ多くの民族に於いては却つて後退さえしているのである。生活はただ複雑化しただけであつて、分子と分母とを約して見ればどういふ結果になるか頗る怪しいといわねばならぬ。

このようなことを考える時、自然に戻るといふことは出来なくとも——出来てもそれは無意味なことかも知れない——何らかの仕方で自然とのリズムを取返すといふことは出来ないであらうか。ストアの哲學に「自然と合致して生きる」といふことがあるが、自然といつても色々な意味があるわけであるけれども、ストアの自然を明かにし、宇宙の秩序と人間の自由といつたものの關係を述べ、今いつたことと多少關係づけて考へて見たいというのが本稿の目的である。

一

今日から見てストアの哲學はプラトーンやアリストテレースの哲學のような花々しいところはないし、またヘーゲル、ツェラーその他の學者によつて、ストアは徒らに新らしい言葉をつくつたが、特に固有なものはないとか、前の哲學者たちの思想を不完全に寫したに過ぎないなどと評されて來た。しかし當時としては無論、歴史的に見ても若

千の新らしいストア獨特のものはあるわけである。最近ストアには命題論理があつたといふこと⁽¹⁾で、論理學者の方から注意されている。しかしストア哲學としては、矢張倫理學に重點があつたといわねばならない。ストア哲學といつても長年月に渡り澤山の哲學者が屬していたので、その考えも色々違つてるのであるけれども、自然學や倫理學、特に倫理學を主要なものとしたといふことでは大體一致していた。

ところでストアのそういう倫理的なものは、犬儒派の系統を繼いだのであり、犬儒派はソークラテース^(前四七〇—前三九九)から出ている。ソークラテースに於いては周知の如く倫理的なものが第一のもので、魂の問題は總てであつた。従つて自然といふようなものは問題にならなかつた。プラトンのバイドロス篇に、ソークラテースはバイドロスとイリソス河邊に腰かけ足を水にひたしながら話をするが、その時ソークラテースは自分のような學びたくてたまらない者は、こういう郊外よりも常に町の人の處へ行く、人間は色々教えて呉れるが、木や土は何も教えて呉れないからだといふ。そこにソークラテースの自然觀の一端が出ているかと思う。ところで犬儒になると大分様子が違ふ。犬儒の代表者はシノペのディオゲネース^(前四〇四—前三三三)である。彼ではソークラテースと同様、魂についての憂慮が何よりの問題であつて、彼はこれを怠つて金儲けに懸命とならぬように警告をしている。しかしソークラテースの時代とは時代も變つてゐる。せいか、國家やノモスのことは眼中にない。彼には家族もなければ祖國もない。彼はシノペから追放されて、アテナイにやつて來たいわば一所不住の徒であつた。彼は魂以外はどんな權威をも認めなかつたし、また求めもしなかつた。彼にとつては當時素晴らしい勢だつたアレクサンドロス大王^(前三五六—前三二三)の如きも眼中になかつたわけで、大王の方から却つてお氣嫌伺いに出たような形になるが、大王が「アレクサンドロス大王だ」といへば「キュニコスのディオゲネースだ⁽⁴⁾」といい、「何か頼みたいことがあつたらいい」といへば「日向ぼつこの邪魔しないで呉れ⁽⁵⁾」といふたといふことは有名である。その他政治家であろうと學者であろうと問題でなく、一般に人爲的なものや傳統的なものは總て認めなかつた。それでは何故に人爲的なものに反對したのであるうか。それは文化の反面に矛盾や害惡が

あるからである。時は政治的に獨立性を失つた窮迫した時代でありながら、人は昔日の花やかなりし頃のこと忘れられずに、メンツにこだわり、色々煩雜な形式、見え、勿體ぶり、儀禮、虚榮等にとらわれて、本物を忘れるからである。文化的なものは他面に於いて人間を不正直にし、不自由にし、益々欲深くし、幸福にする代りに却つて不幸にするからである。かくて彼はそういう文化的なものは何も認めなかつた。寧ろ人々をつかまえては、それらの矛盾を素破抜いたり、惡口したりしてさえている。そういうものからの脱却は彼では言論に於いては *καταψαύειν* として現れ、行動に於いては *ἐκβάλλειν* として現れた。⁽⁶⁾ パレーシアアとは何でも思つたことを遠慮なくいうことである。世間で何が一番いいことかと訊かれて、彼は「言論の自由」⁽⁷⁾と答えている。アナイディアとは行爲に於いて何ら遠慮會釋のないこと、つまりよくいえば天真爛漫であり、惡くいえばつつしみのない傍若無人ということである。彼は公然とデーメーテールのやることやアプロディーテのやることをやつたとか、⁽⁸⁾ また一説によれば彼には「理想國」なる書物があつて、そこでは人肉を食ふことや近親相姦が許されていたともいわれる。⁽⁹⁾ 自然はわれわれにとつて必要なものは容易に得られるようにしてある。水や空氣はただであるし、また日光も無料であり、果物や野菜は豊富に與えられる。然るに人は必要もないつまらぬ人工物に値打をおいて、あくせくしているのだ。人間は非常に簡単に生きて行けるのに、面子だの恥かしいだのとそのデリケートの故に、動物よりも惨めな生活をしているというわけである。かくて彼は、動物や子供の如きを手本にした。子供が手に水を掬つて呑みこんでるのを見て感心し、雜囊の中のコップを不用なものとして棄てたといわれる。⁽¹⁰⁾ また或時彼は鼠が走り廻つていながら、ベットをさがすのでもなければ、暗がりをおそれるのでも何かうまいものを求めるのでもないのを見て、環境から轉換する道を發見したといわれる。⁽¹¹⁾ 動物は水を呑み草を食らい、年中裸である。家もなければ火も用いない。かくてディオゲネース自身樽に住み、水を飲み、干無花果や人の施すもので生き、動物を手本として、寒暑に平氣となるためには、夏は熱い砂の中に寝ころび、冬は雪に被われた石像を抱いたりしている。⁽¹²⁾ これらは何れもアスケシスであつて、「人生に於いては何事も訓練なくしては達成され

ない⁽¹³⁾」というのである。

以上はディオゲネースの自然に従う生活である。それは子供や他の動物の生活を手本としたものであつて、原始的な生活である。しかしそれらの中にも神的なものが見られるわけで、こだわらないこと素直なこと、寡欲で巨萬の富を貯えようとしなないことなど数多くのが教えられる。ディオゲネースはどのような簡単に生活出来るかを、身を以つて教えた。しかも魂の上でいかに本質的なものをつかんでいたかは、かのアレクサンドロスをも羨しがらせたり、⁽¹⁴⁾後でストアの理想的賢者の一人とされたりしたことからも知られるが、むしろ魂の問題、魂の自由のためにこそノモスの煩雜を去つて簡易な生活にいたのである。しかし彼は學者ではなかつた。自然とは何かとか、自然と魂との關係とか、人間は自然に於いていかなる位置を占めるかといつたようなことは、彼には問題にならなかつた。

ストア哲學の創始者である　　ノーン^(前二三六)は、ディオゲネースの弟子であるクラテース^(前二八五)についた。最初恥しさを取り去るために犬儒道の訓練をさせられたわけであるが、とにかく犬儒から心の自由を學ぶことが出来た。しかし彼は犬儒のスケールの小さいことや行儀の悪いこと、特に理論のないことに満足出来ず、メガラ學派のステイルポーン^(前三八〇)やアカデミー學派のポレモン^(前三一四)につき、更に多くの哲學書を勉強して、特にヘーラクレイトスに多くを學んだらしい。プラトーン・アリストテレス出現後の彼には、クラテースやソークラテースの如き單なる倫理ではあき足らなかつた。同じ倫理を重んずるにしても宇宙自然にさかのぼり、宇宙の問題から出發したところにストアのストアたる場所があるのである。自然を説明しないでは、古來の格言もその本當の含蓄を理解することは出来ないからである。「汝自身を知れ」とか「お前はお前があるところの者になれ」という如きも、宇宙に於ける人間の位置や人間の本性を知つて始めて理解出来るのである。

(1) 例えば Eusewicz や Mares 後者に Stoic Logic なる書あり。

(2) 創始者キティウムのゼーノーン^(前三三六)よりマルクス・アウレリウス皇帝^(後一二二)に至る。

- (3) 一説によれば、彼がシノーペで或る官についている時、デルフォイの神託を伺つたら、通貨を變えよということであつた。彼はその意味がわからない儘、當時その都市に通用していた貨幣に混ぜものをした。それが發見されて國外に追放されたという。神託の通貨とは本當には當時行われていた慣習のことであつた。(Dudley, History of Cynicism p.31)
- (4) Diogenes Laertius VI 60
- (5) D. L. VI 38
- (6) Dudley, op. cit. p. 27~28
- (7) D. L. VI 69
- (8) ibid
- (9) Dudley, p. 25
- (10) D. L. VI 37
- (11) D. L. VI 22
- (12) D. L. VI 23
- (13) D. L. VI 71
- (14) D. L. VI 32

二

それではストアの自然とはどういう自然であらうか。それはソークラテース前の、特にヘーラクレイトス的な自然である。近世でいえば、實體であり神であるスピノーザの自然のようなのが一番近い。それは神であり、人間や他の一切の被造物を含む廣い意味の自然であつて、近世の自然科學で考えるような自然ではない。ストア哲學の創始者であるゼーノーンを始めとして第三祖のクリュシッポス、その他この學派の多くの人々はセム族⁽¹⁾の人であつた。そして彼らはギリシアの哲學を勉強してストア哲學をつくつたのである。セム族は宗教的であるといわれる。しかし彼

らはギリシアの自然を學んだのである。彼らの血統は不知不識のうちに、ギリシアの自然を著しく宗教化したということが出来るであろう。それにしても矢張ギリシアの自然であり、どこ迄もギリシア文化の一面を持つてゐる。文化否定にならず、しかも單なる文化や道徳で終らなかつたところにストアの特色があるといえるかも知れない。

ストア哲學は周知の如く唯物論である。どうして唯物論となつたか詳しいことはわからないが、物體的なものと非物體的なものとは結びつくことは出来ないのに、肉體と靈魂とは結んだり離れたりするから、靈魂は物體的なものであるとか、またはずかしい時に赤くなつたり、恐ろしい時に蒼くなつたりするところからして、このような精神的なものも物體的であるとは断片から知られる。⁽²⁾しかし唯物論的な傾向は時代の移り行きに基づいたものではなからうか。

政治的に獨立性を失つてその日の生活にさえ事缺く時代に於いては、總て具體的、實際的なものが注意を惹くのは當然であろう。それは何よりも先ず、衣食住からしてそうなつたものと思われる。そういう點からすれば、イデアの如きは單なる觀念と考えられたであらう。本當の馬はイデアとしての馬ではなく、荷物を積んで避難したり、人を乗せて戦つたりすることの出来るものでなければならぬし、また家は粗末な家ではあつても、雨露を凌ぎ憩うことの出来るものであれば、そこに實在性もあり、値打もあるわけである。またこの時代は形而下的なものが特に注意されたようにも思われる。アレクサンドロス大王の遠征には學者も多くお伴したわけであるが、彼らの報告は氣候風土、動植物、風俗慣習という如きものであつたらしい。そこからしても一般に存在は感覺的なつかまれるもの、少くともそれらから説明されるものと考えたのではなからうか。更に一層注意すべきは、この時代は實踐が重んぜられたということである。重んぜられたというよりもそれ以外なかつたわけであらうが、生きるということが既に實踐であつた。しかも實踐は肉體を通して他の感覺的なものに働いたり、或は他から働きを受けたりすることである。ストアの認識論には *katahyphesis* とか *epiorthosis* といったような獨自の言葉がある。kata は共に客觀の實在に即する、ということであり、その儘、ということである。單なる主觀ではなくしてあるところのものそのもののある通りに把握するとか、

客觀をその儘客觀としておいてこちらも一緒になつて措定しうけがうことである。これらは主との間に越え難き一線を劃した客の存在を認めてのことであつて、この時代の現實の嚴しさをよく表わしていると思われる。そしてそのようなことは彼らが好んで研究したヘーラクレイトス⁽³⁾の物活論と結んで唯物論となつたのではなからうか。ゼーノーンによれば總て存在は働くもの、もしくは働かれるものであつて、それは皆「*oizous*」(物體)である。プラトンは既にソピステース篇に存在は働くもの、もしくは働かれるものであるといつてゐる。しかしそれはソーマではなかつた。寧ろプラトーンでは唯物論者は「手でつかまれるもの」しかわからぬ者と評せられてゐるのであるが、時代は正にそのようなことを敢えて犯さしめるに至つた。かくて時間、場所、空虚、意味の四つ⁽⁴⁾のものを除けば、一切のものは物體であり、神も純粹な思维的なものではあるが物體であり、魂もそうであるし、また單一なもの、複合したもの、孤立したもの、接觸したもの等も悉く物體である。物體というのはクリューシッポスによれば三次元、即ち長さと幅と深さと更に抵抗とを持つものである⁽⁵⁾。しかし物體といつても一義的ではない。現實の個々のものという場合には、三次元と抵抗とを持つものとして、個物的な物體を意味する。それはどこ迄も多の世界で、個性的な物の世界である。木の葉は一つ一つ皆違つてゐるし、また麥の粒は夫々皆異つてゐるのである。ところでこれらの個物はもつと根源的な存在の「限定されたもの⁽⁶⁾」である。この根源的な存在というのも物體である。従つて三次元と抵抗とを持つものであるけれども、個物ではなくしてそれらの根源として一なる物體である。一なるとはいつても抽象的なものではなく、個物に即し、内在し、個物をその限定乃至状態とする存在である。ストアの哲學は本當にはモニズムである。その根源的なもの、それは *ousia* であり、また *ousia* ともいわれる。ところでこのウシアには二つの原理⁽⁷⁾として働くものと働かれるもの、もしくはつくるものとつくられるもの、即ちロゴスと質料とが屬している。原理というのは後で述べる元素が生滅するものであるのに對して、永遠であり、不滅なるものである。尙ストアの斷片によれば概念の規定は甚だ不明であつて、質料やウシアやヒュポケイメノンがアリステレース以來の傳統的なものであつたり、

ストア獨自の意味であつたりして理解に困難⁽⁷⁾に片付けることは出来ないが、詮するところモニズム的なウシアがあつて、ロゴスと質料とはその二つの面であるということが出来るかと思う。ロゴスつまり理性というのは能働的なつくるものであり、質料は受働的なつくれるものであつて、後者は無性質のもの、アリストテレースのいう質料と考えて差支ない。ところでこのロゴスと質料とは何れもソーマであり、物體であつて、そして兩者は常に貫き合つて居り、引き離すことは出来ない。それはスピノザ的になるがボーレンツのいうように一實在の二面ということも出来よう。かくて質料は外から色々なものに形成されるのではなくして、自分が自分を限定し、自分の状態として色々なものになるのである。質料は自らの中に形成の原理たるロゴスを宿しているのである。このことが理解されないと、プロティノスのなしたように、如何にして潜勢的な質料から種々のものが生ずるのかといったようなのはずいぶん問も生ずるわけである。抽象的には右の通りであるが、具體的にはヘーラクレイトスの火を考えていたようである。つまり「彼らには自然とは φύρ τεχνικόν⁽⁸⁾であつて、道を通つて生成へ進む火的にして技術的なブネウマであると思われた⁽⁸⁾」といわれている。その火はそこからして一切が出て来て、また一切がそこへ歸着する火なのである。それは總てを生かす生命の原理であると共に、一切を殺すものでもある。それは一切を焼くものであると共に各物を形成し、各物の中に入つて、例えば動植物の中にあつてそれを生かす火なのである。火がこのように考えられたことに對して、シモンは「ストアが火を神や自然と同格にしたのは偶然ではなく、イデオロギーとして一定の階級に仕えようとする學派の教への社會的な働きと一致する⁽⁹⁾」といつて、ストアが對象としていた人々は、大部分日常生産のために火力と接觸してゐる階級の人々であるかの如く述べている。ストアが庶民階級相手であることはその通りであるが、彼らが働く階級、特にも火力を以つてする人たちであるからストアは火を以つて神と同格としたというのはどうであらうか。火がギリシアに於いて神聖視されていることは既に歴史あることであつて、特にヘーラクレイトス哲學に多くを學んだストアには別に不思議ではない。

ところでウシアから如何にして個々のものが限定されるか、つまりその一なる火から如何にして多の世界が生ずるか。この説明として考えられたのが元素である。つまり今いつた勝義の火が一步生成界へ踏み出した時、四元素としての火となり、それが収縮もしくは凝集によつて空氣に變り、空氣は同様にして水に、そして第三番目に水は地に變る。また地が解消した時水となり、水は氣となり、氣は火となる。この場合火的なものは總て火、氣的なものは空氣といわれるわけで、その他も同様である。⁽¹⁰⁾従つて四つの元素は、エンペドクレースに於けるような同格的な最後迄自性を保つ元素ではなくして、一が他から生ずる如き元素でヘーラクレイトスのそれと同様である。ところで或ものはこれら元素のうちの一つだけから、或ものは二つ以上の、また或るものは全部の混合によつて生じ、かくして宇宙間の諸物が形成される。例えば動物や地上のものは總てから、天上の月は火と空氣とから、太陽は純粹にただ火からのみ生ずるのである。⁽¹¹⁾そのうち火と空氣とは能動的にしてつくるものであり、水と地とは受動的でつくられるものである。特に火と氣とは一緒になつてプネウマをなし、そして緊張によつて統一するのである。物を統一するのはプネウマで、プネウマを離れて他の諸物はない。諸物はプネウマによつて生成するのであるから、プネウマに先立つてあることは出来ない。⁽¹²⁾ところでプネウマの緊張とは何か。今歴史的にいうならばカークのいう如く、ヘーラクレイトスの「反撥的な調和」からクレアンテースが發展させた⁽¹³⁾と見るべきであろう。クレアンテースは緊張の考えを擴大して宇宙の總てを説明しようとした。彼は「緊張とは火の衝擊である」⁽¹⁴⁾と定義している。宇宙全體は緊張に充ちて居り、中心と周邊とに張り合つて緊張をやめない。クリュシッポスはクレアンテースの考えを論理的にし、學問的、組織的にした。彼によれば緊張はプネウマの緊張であり、總てに行渡つて宇宙全體を統一結合しているものである。⁽¹⁵⁾つまり緊張は質料に統一と凝集とを與えて、石や木の如きものより精神的なものに至る迄の一切萬物を成立させるものである。クリュシッポスは緊張に二つの運動を考えた。一つは「弛緩させる運動」であり、他方は「收縮させる運動」である。前者は「遠心的」であり、後者は「求心的」であつて、一方は性質や大きさの原因であり、他方は存在

や統一の原因である。⁽¹⁶⁾ かくて二つの運動が平衡を保つ時は靜止しているように見えるわけで、例えば河の流れにさからつて泳いでいる時には、同じ場所に止つていても、流れの激しさに對して同等の力で張り合つているのであつて、その故に動かないのである。空飛ぶ鳥が同じ場所にとどまつてゐる場合でも同様である。⁽¹⁷⁾ かくて緊張、つまり相反する力の統一に於いて一切萬物が成立してゐるわけで、ここに反撥の調和なるヘーラクレイトスの考えが十分生きてゐる。

この緊張の思想と結びついてストアには「全體を通しての混合」⁽¹⁸⁾ とか、「お互を通しての混合」⁽¹⁹⁾ という思想がある。これはゼーノンの考えたもので、クリュシッポスがこれを踏襲してゐる。ゼーノンは「性質のようにウシアも全體を通して混合する」⁽²⁰⁾ といつてゐる。混合とは二物もしくはそれ以上のものが相互に入りまじり、互に流通するのであるが、一體それはどういふことであらうか。それは一方が包み、他方が包まれるということでも、一方が受取り、他方が中にあるということでもない。かくては混合でなく表面の接觸であり、他方に混合しない部分を残すからである。⁽²¹⁾ それは酒の一滴が海水全體に擴がり、灼熱した鐵に於いてそれぞれ自性を保持しながら火が鐵の全體に行渡つてゐるやうなものなのである。⁽²²⁾ 魂と身體とでいふならば、魂は身體の全體、頭、天邊から足のつま先迄行渡つてゐるし、またヘクシスも他の物體を通貫してゐるのである。逆にいえば身體が魂を、そして物體がヘクシスを通貫してゐるのである。⁽²³⁾ このことは「二物が同時に同一場所を占める」⁽²⁴⁾ 如く考えられ、前に述べた物體の條件たる抵抗に矛盾するやうにも思われるが、しかし混合の意味は必ずしも矛盾をもたらずものではない。何故ならストアでは物體は無限に分たれるものであるから、エピクローソスのアトムatomosの如く不可分のものではなく、物は互に文字通り貫き合う⁽²⁵⁾ ということが出来るからである。むしろそれよりも恐るべきは、「混合」や「張り合う」⁽²⁶⁾ という考えが、萬物渾一の思想に導きはしないかということである。各物はそれぞれ異なり、多元論的に考えられたのであるが、もしそれらが互に貫き合つてゐるのであるならば、各物にけじめがなくなり、アナクサゴラスのホモイオメレーhomoiomereisの如くなりはしないかと疑

われる。これに對してわれわれはロディエが「われわれが表面だと思つてるところで一つの物が終つてると考えるのは錯覺で、それは見掛けに過ぎない」⁽²⁷⁾といい、われわれが見て全く滑らかな表面だと思つてるところも結局は物が少しづつ減じているに過ぎないので、われわれはその中心核を何らかの仕方では知るだけだといつたことを以つて答えられるかと思う。結局混合し、貫き張り合つても決して渾一して同等になるのではなく、緊張の緊密の程度、混合の如何によつて、それぞれ段階はあるわけであるし、また宇宙全體としても相互の緊張、混合の状態にあると見ねばならぬ。かくて各事物に於いては無生物の凝集力によるヘクシス、植物に於けるプシス、動物に於けるプシュケーの如き差別、段階を認めねばならぬ。植物に於いてはプネウマは濕つて冷たく、そして榮養や成長や繁殖の働きがある。また動物に於いてはプネウマは乾いて暖かく、働きとしては更に心像とホルメーとが加わる。人間のプネウマに於いては更にロゴスがあるわけである。

以上の如きストアの宇宙は一つの生物であり、一つの有機體である。全體も部分も一つのプネウマに貫かれて統一されて居り、部分は全體の限定として全體を宿し、全體の生命を息づいている。また各部分はその混合の故にそれぞれ他の一切を宿し、共感し合い、全體として調和するといわねばならない。かくて個々のものはそれぞれの位置と役割とを持つて全體のいのちを生きているのである。

ストアの質料はロゴスを宿せるものであるから、運動の原理を持つたものでなければならなかつた。そしてその故に自ら限定し、もしくはその状態として個々の物、無生物の如きより動植物、人間、神々等をつくつたのである。ところで運動といつても色々あるわけで、クリューシッポスは運動を、全體によるものであつても、部分によるものであつても、物體のトポスに於ける *μεταβολή* もしくは *μετάληξις* ⁽²⁹⁾ であつた。そして彼は根源的な運動に直線運動と曲線運動とを區別し、そしてこれらの種々なる混合から各種各様の運動が生ずると考えた。⁽³⁰⁾ また運動を *ἐκκλίσις* となし、それにトポス上のそれと性質上のそれとを區別し、前者を *ῥοπή* といい、後者を *ἀλλοίωσις* といふ。クリュ

ーシップスは運動を色々分けたらしいが、現存の断片からは詳しくはわからない。しかし次の如きもその一種と考えられる。第一は「自分からの運動」(*τὸ ἐξ αὐτοῦ κίνησις*)、例えば剣は自分自身の仕組からして物を切る如きである。形や自分の本来の構成からして形相の點で働きを完成するからである。第二は「自分による活動」(*τὸ δι' αὐτοῦ ἐνεργεῖν*)、例えば狹義の自然や醫學的能力が働く時の如きである。種子は固有のロゴスに充ちていて、質料を奪い去つて自分の中のロゴスを形成するからである。第三は「自分からの働き」(*τὸ δι' αὐτοῦ ποιεῖν*)、つまり自分の固有のホルメーから働くものである。第四は「理性的な意欲から」(*ἀπὸ λογικῆς ὁρμῆς*)動くことで、それは行動πρᾶξιςするといわれる。第五は「徳に従つた活動」(*τὸ κατ' ἀρετὴν ἐνεργεῖν*)である。しかしこれは前よりも一層特殊のものである。⁽³¹⁾要するところ以上の如き差別は無生物、植物、動物、人間に於けるものを區別したものといえよう。これに關連して静止にも色々あるわけで、「とどまる」(*τὸ μένειν*)「じつとしている」(*τὸ ἡσυχᾶν*)、「靜かにする」(*τὸ ἡσυχάζειν*)、「動かない」(*τὸ ἀκίνητον*)、「不動である」(*τὸ ἀκίνητον εἶναι*)がそれである。「とどまる」とは過去、現在、未來に渡るもので、今現に同じ場所を占め、これからも占めるであらうことをいうので、それは一切のソーマに共通に用いられる。しかし「じつとしている」や「靜かにする」というのは動物の場合には用いるが、石や木にはいわない。本来自分から動かないように出來てゐる物の場合には *τὸ ἀκίνητον* とか *ἀκίνητος* という言葉が用いられる。⁽³²⁾

運動があるためにはトポスがなければならぬ。クリューシップスは、トポスを存在によつて占められるものといつてゐる。⁽³³⁾トポスとはストアではソーマではない。それはソーマたるの必要條件である働くとか働かれるということをして缺いているからといふのである。しかしトポスは、ソーマの存在にはなくてはならない極めて本能的なものである。セクストス・エンピリクスによればクリューシップスは「始めにカオス生じ、次には常に萬物の安らげき座所として胸廣き地生じき」というヘーシオドスのカオスを、宇宙を容れることの出來るトポスと解釋している。⁽³⁴⁾トポスには三つの間隔、即ち長さと幅と深さとの三次元がある。しかしそれはソーマでないから「抵抗」を持たない。それはソーマ

マではないが、いつもソーマに占められてるものである。クリューシッポスは、トポスをそれと似た空虛ケルンやコーラと區別した。空虛というのは、「存在によつて占められ得るが占められていないもの」⁽³⁵⁾、従つて「ソーマのない」⁽³⁶⁾、つまり「ソーマによつて占められていないディアステーマ」⁽³⁷⁾である。空虛は宇宙の内部には全然ない。それは宇宙の外にあるのであるが、嚴密には空虛はあるともいえないし、またないともいえない。何故あるといえないかというに、あるものはソーマだけなのに、空虛はソーマではないからである。また何故ないといえないかといえば、世界燃焼の時、燃えて擴がつて行くものを受容れるものがなければならぬからである。かくて或斷片では「一種の存在」⁽³⁸⁾といい、非常に單純なもので、ソーマでも、觸れられるものでも、形づくられるものでもないあるものを意味している。それは無限定なものであるから、始めもなければ中もなく、また終りもない。空虛とはソーマを受取ることが出来るのに、受取つていないディアステーマであるともいわれる⁽³⁹⁾。また空虛はアソーマであり、アソーマであるとはソーマに占められ得るのに占められていないことを意味するともいわれている⁽⁴⁰⁾。ところでトポスはトポスを占めてるものに等しい⁽⁴¹⁾。従つてトポスはそれだけ裸では存在しない。つまりソーマのないところにトポスはない。クリューシッポスは空虛を空つぽの容器に比し、トポスを充されてる容器になぞらえた。次にコーラであるが、これは *τὸ ἐν μέσῳ ἐχόμενον* ⁽⁴²⁾で、例えば酒壺の如きもの、つまりソーマに占められてるものと占められてないものとのからなるディアステーマである⁽⁴³⁾。宇宙の外は無限定であるから、空虛は無限定である。しかしトポスは、ソーマが無限定でないために無限定ではない。尙クリューシッポスは、コーラを「ソーマよりも大きいトポス」といつた。それは空虛をも含むトポスというわけである。

ところで運動がなされるためには空間がなければならぬと共に、時間がなければならぬ。時間も同じくアソーマであり、従つて存在ではないが、何らかの意味に於いて客觀的にあるのでなければならぬ。では時間とは如何なるものかというに、ゼーノーンは「運動の間隔」⁽⁴³⁾といい、クリューシッポスは「宇宙の運動の間隔」⁽⁴⁴⁾と定義している。

彼が特に宇宙という言葉に附加したのは、宇宙と密接に關係しているからであらうが、その宇宙というのはただに今の秩序づけられてる宇宙だけでなく、世界燃焼後に想像される宇宙をも意味する。そして時間は遅いとか、速いとかいう場合の測定の尺度をなすわけである。ところでクリューシッポスは宇宙の運動の間隔を時間というように、宇宙の運動を時間にとつて不可欠のものとしている。従つて宇宙の運動なければ、時間はないわけである。だから時間は宇宙以前にあつたのではなく、宇宙と同時に、或は宇宙の後に生じたのである。つまり運動は動くもの即ち宇宙より後か、或は同時に生じたものでなければならぬ。従つて時間は宇宙と同年輩か、それより若いかでなければならぬ⁽⁴⁵⁾。ところでクリューシッポスによれば、丁度空虚があらゆる方向へ無限定であるように、時間も無限定である。つまりそれは過去も無限定であれば、未來も無限定である⁽⁴⁶⁾。それで人は何人も時間を全體的に持ち來らすことは出来ない。連續してるものの分割は無限だからである。従つて時間は分割すれば無限である。故に時間は完成して現在することなく、幅のあるものとして語られる。かくてクリューシッポスは、時間に「過去」(*o kakou pōtēnos*)、「現在」(*o nūnōs*)、「未來」(*o mēlōn*)を分けているが、そのうち過去と未來とは本當にあるものではなく、單に考えられるものであり、本當にあるものはただ現在だけであるとなした⁽⁴⁷⁾。従つて過去とか未來とかいうのは、實は現在の中の過去であり、現在の中の未來なのである。つまり嚴密には「現在の中の或ものは未來であり、或ものは過去である」からである。先刻とか最近とかは皆考えられたもので、存在するものではない。それに對して「現在」というのは、考えられたものではなくして現にあるものなのである。それからストアではヘーシオドスの考えを次の如く解釋していた。時間の神であるクロノスは、ウラノス(天)とゲー(地)との子供であるとヘーシオドスは傳えているが、それはクロノスが地上、地下の諸々の星晨の上昇から生じたからなのである。つまりわれわれはこれらの星晨によつて晝夜、月、四季をきめるからである⁽⁴⁸⁾。言葉を変えれば宇宙の天體の運動の間隔によつて、晝夜とか月とか四季とか年とかを人が決めたわけなのである。また神話ではクロノスは自分の産んだ子供たちを呑んだとあるが、それは時間に

よつて生じたものはまた時間によつて滅びることだと解釋している。⁽⁵⁰⁾

ところでストアでは *τὸ πᾶν* と *τὸ ὅλον* とを區別して用いている。前者は空虚をも含めたものをいい、後者は空虚を含めぬ宇宙^{コスμος}だけをいうのである。⁽⁵¹⁾ *τὸ πᾶν* は無限定なる空虚を含むが故に無限定であり、その無限定と不定とのために無秩序であるが、これに對して宇宙は限定されたものであり、秩序づけられたものである。ストアは宇宙を以つて球形のものとなしている。それはポセイドーニオスのいう如く運動するのにも最も適しているからである。⁽⁵²⁾ これらのことは別にストアの獨創ではない。プラトンの影響は案外大きいと思われるのであるが、クリュシッポスやポセイドーニオスはプラトーンに従つて宇宙を理性的な魂を持つた叡智的な生物と考えている。⁽⁵³⁾ しかしクリュシッポスは宇宙という言葉を通りに考えていた。第一には神自身を意味した。この場合は不生不滅である神で、一切の秩序を形成したり、一切を自己の中に消滅せしめたり、また總てを自分から生成せしめたりする。従つてこの宇宙は *natura naturans* ということも出来れば、根源的な火であるということも出来る。ストアイオスはクリュシッポスの言葉として「秩序を生ぜしめ、それを完成させる原因として神を宇宙という」と傳えている。⁽⁵⁴⁾ 第二には *natura naturans* に對して *natura naturata* に當るものを宇宙というのである。それは天體だけでなく、天、空氣、地、海とその中の一切の自然物とを合せていうので、所謂形體的な所産的自然である。⁽⁵⁵⁾ 第三には以上の兩者を合せたものをいう。つまり神や人間たちやその他それらのために生じたものとなるものである。⁽⁵⁶⁾ それで宇宙とは「神々と人々との住家」⁽⁵⁷⁾であるとか、「神々や人々やそれらのもののために生じたものからの組織」⁽⁵⁸⁾といわれるのである。それは單なる結合とか合併というのではなく、一方は支配し、他方は支配されるので、兩者は不可分離的に貫き合つてゐるのである。そういうわけで宇宙というのは具體的には第三のものでなければならぬが、そのうち支配的な第一のものを取立てていう場合もあれば、支配されている第二のものを意味する場合もあるわけである。

ストアでは質料は既にロゴスを宿したものであつて、外部からではなく自分が自分を限定し、この形體的な自然、

つまり所謂宇宙を形成したのである。従つて宇宙はその名の如く、秩序整然たるものであつて、出鱈目のものではない。ストアは唯物論ではあるけれども、既に精神的なもの——それも一種の物體ではあるが——と不可分離的に結びついているものであつて、そしてその故に、後に述べる如く宗教的にもなるわけで、形成された宇宙は形成者たる自然の、もしくは神の攝理を離れるものではない。彼らの見た宇宙の構造は今日から見て不十分ではあるけれども、それにしても全體との關連、構成の不可思議さを彼らはよく觀察し、そして常に讃歎してやまなかつた。天體の秩序、地球の構成はそれぞれよく出來ているが、元來ばらばらなものではなく、「宇宙は一つなので」⁽⁵⁹⁾あつて、地上のものは天上のものと調和し、丁度音樂に於いてのように、諸部分は互に交通し共感して、一切はシュンフォニーをなしているのである。だから宇宙は全體としては完全なものである。しかし諸部分は完全ではない。何故かといへば諸部分は全體に對して何らかの仕方に於いてあるわけで、獨立して自分であるのではないからである。⁽⁶⁰⁾それにしても個々のものがそれ自身如何にうまく出來てゐるかは、ストアの哲學者たちがその自然界や動植物の觀察、研究に於いて、また人間の反省に於いて、常に驚歎したところであつて、そしてその故にいつも攝理と結びつけたのである。

ところで宇宙の個々のものがそのように秩序よくうまく出來ていても、攝理によつて決められた或長い一定の期間を經過すれば、火になつてしまう。これが劫火ともいうべきストアの「世界燃焼」(ekpyrosis)という思想である。

これは宇宙は生じたものであるから、消滅するというわけで、宇宙の部分的な個々のものを觀察してそれからアナログイによつて考えたものと思われるが、歴史的には一切萬物が火から生成して、また火の中に燃焼し去るというヘーラクリトスの思想に近いといわねばならぬ。⁽⁶¹⁾この燃焼によつて一切は火になつてしまうわけであるが、それは所謂宇宙がなくなつても無になるわけではなく、火として残る。ギリシア思想では無からは何も生じないし、また何物も無になりはしない。ゼーノーンはこの世が火になりつつあることを次のことから知られると考えた。海は既に小さくなりつつあるわけで、デロス島やロードス島などは新らしく海から現れたのであるし、また海にある貝殻や小石が大地

にあるのは海が陸になつた證據である、また空氣は少くなりつつあつて、一切は火に分解しつゝあるといふのである。⁽⁶²⁾
ところが世界燃焼が起つて所謂宇宙がなくなつた時、この時こそ却つて宇宙は完全に生きているのであつて、この時宇宙はその身體を食い盡して、魂やヘーゲモニコンになつたのであり、「神の權力に従つて他のものを征服した」⁽⁶⁴⁾のである。では何故世界燃焼が起るかといへば、それは攝理に従つてには相違ないが、一切の罪惡から淨化されて新しく生成するためである。故に「世界燃焼といふのはカタルシス」⁽⁶⁵⁾であるとか、「消滅とその消滅から他のものの生成するのをカタルシス」⁽⁶⁶⁾といふのである。一切が火に歸した後、この根源的な火から種子となり、種子から以前あつたような秩序が生ずるが、これを彼らはディアコスメーシスといつた。そしてこの燃焼と再生の過程は永遠に繰返される。しかもその過程は全く同一である。例えばソークラテースは同じ兩親を親として生れ、キサンチッペと結婚し、同一の友人、同一の市民と一緒に、同じ目に逢つて死ぬといふわけである。宇宙はかく消滅、再生はしても何ら増減はない。それは大なる量に擴つても小さい量に縮つても増減の變化はなく、丁度蠟細工する人が蠟から澤山の馬をつくり、それから少しずつ取つて別のものをつくつたり、最後には皆を一つにしてただ一つの形をつくつたりするようなものである。⁽⁶⁷⁾かくて燃焼した時、燃えたものは擴つて宇宙外の空虚を充すわけであるが、燃焼によつて一切が淨化せられ一定の時期が來ると、焰は凝集して宇宙の再生が始まり、今いつた如き前と同一の世界が生ずるのである。この過程は永遠に繰返されて、その間には何ら新しいものはなく、最も小さい點迄も正確に同様である。

かくてストアでは一切は攝理の下にあつて、いかなる出來事も新らしいものではなく、きめられてあるものであるから、この鐵則を逃れることは出來ず、従つて一切は運命の下にあるといふことが出来る。ストア哲學は運命論であるとか決定論であるといふにわれる所以である。

そういった決定論的な考えは、既に種子的ロゴスの中にあるといわねばならぬ。ストアでは質料はロゴスを宿しているわけであつて、この種子的ロゴスから物が出來ることになるが、宇宙でいえばただ一つの宇宙的な種子的ロゴ

スがあり、個々のものに於いてはそれぞれ種子的ロゴイというものがあつて、前者に於いてはこの宇宙がそれから形成され、後者に於いては各個物がそれぞれそのロゴイから發展展開して來ると考えられる。宇宙的な種子的ロゴスは一切がそこから出て來て、またそこへ歸するというわけで、丁度植物が種子から生じ、また植物が實を結んでそこに統一されるようなものである。故に「一つのものから一切が生じ、一切から一つとなる」⁽⁶⁸⁾とクレアンテースもいつているのである。ところで「種子」(*σπέρμα*)というのは *σπείρα* から由來するのであつて、*σπείρα* というのは捲き込む、ということである。つまり種子というのは小さい分量の中に多くの分量のものが捲き込まれているわけで、丁度ゼンマイがほどけるように種子の中にあるものが展開して來るのである。従つて豫め含まれていないものは出て來る筈がなく、出て來るものは始めからあつたので、新らしいものは何もないということになり、創造はあり得ないわけである。従つて人間以外のものもそうであるが、人間に於いてもそれぞれの分前を受けていて、要するにそれを展開するということになる。「運命」(*εἰς ἀποῖνον*) という語が既に *ἡγεμονία* (分け前を受ける) という語から來ているのである。ヘイマルメネーについては嘗て叙べたことがあるので、⁽⁶⁹⁾ここには避けるが、一つ二つ引用すれば「運命とは宇宙のロゴスである」とか、「過去に生じたもの、現在に生ずるもの、未來に生ずるであらうものの従うロゴス」である。⁽⁷⁰⁾それは盲目的とか非合理的とかいうものではなく、いわば神の理性によつて計畫された理法である。それは必然的なものでそうしかならないもの、原因の鐵則につながるで踏みにじることの出來ない秩序や結合である。

しかし一切がこのような鐵則の下にあり、何も自分から活動することが出來ないとすればどういうことになるであろうか。われわれの持つてゐる自由は全然虛妄となり、われわれの持つ道德的責任や法律による刑罰も、何ら意味をなさないこととならねばならない。かくて當時に於いても、他の學派から色々の批評や非難を受けたのである。洵に、人生にとつて大切な自由を説明することの出來ないような哲學は哲學の名に價しないといえる。人間の行為は物理現象ではない。必然とか決定といつても人間の場合にはそう單純なものではない。

(1) 例えばゼーノーンはキュプロスのキティウムの人であるが、両親はフェニキアから移住したフェニキア人であつたし、またクリューシッポスはキュプロスのソレウスの人、ベルサイオスはキティウムの人、その他クリューシッポスの弟子であるゼーノーンやアンティパトロス、アルケデーモスはタルソスの人であり、ポエトスはシドンの人、そして同じくクリューシッポスの弟子なるディオゲネースはバビロンの人というわけで、これらの人々は殆んどストアの初期の人々である。彼らは皆アリアン族でなくセム族であつたらしい。セム族の中には彼ら特有の宗教的、しかも一神教的な根強い血の流れがある。ゼーノーンがフェニキア人であることは文献の上では、彼が先生である犬儒のクラテースから豆のスープのは入っている盥をたたきこわされて逃げた時、クラテースが「フェニキアの青年よ、何も怖いことはない」といつたところ(D. L. VII 3)やアカデミーのポレモーンが聴講に來たゼーノーンに「よくわかつているんだがね、ゼーノーン、君は庭戸からこつそりやつて來てわしの學説を盗み、それをフェニキア式につくり變えるのだろう」(D. L. VII 25)といつたところから知られる。尚ディオゲネース・ラエルティオスによれば、ゼーノーンの父は *Mageas* という名であるが、ポーレンツはそれはフェニキア語の *Manasse* から來たという。彼によればキュプロス島はギリシアの植民地であつた以前はフェニキアの支配下にあつて、ペルシア戦争以前の貨幣を辿ればフェニキアの支配者がわかるとか、寺や役所の言葉などでフェニキアの支配下にあつたことが論證出來るといつてゐる。(Pohlenz, *Die Stoa* S. 23)。またゼーノーンの容貌からもわかるといわれている。

(2) *Animi, Stoicorum Veterum Fragmenta* (以後 SVF で表す) I 137, 518 後者の箇所ではクレアンテースは次の點からも魂を物體であるとしている。われわれは肉體に於いても魂に於いても両親に似るものだが、似るとか似ないとかは物體的なものに於いていえることである。だから魂は物體である。物體的なものと非物體的なものととは共感しないし、また非物體的なものは物體的なものと共感しない。ただ物體的なものと物體的なものとのみ共感する。魂は病氣や手術の時、肉體と共感する。逆の場合は恥かしい時赤面し、怖い時蒼くなる。

(3) クレアンテースはヘーラクレイトスの解釋について四巻の書物を書き(D. L. VII 174)『スプアイロスにはヘーラクレイトスについての講義五巻がある(D. L. VII 178)』ゼーノーンにはヘーラクレイトスに關する書物がなかつたものか、とにかくディオゲネース・ラエルティオスのリストには載つていない。だが G. S. Kirk (Heracitus The Cosmic Fragments p. 367) のいう如く、ゼーノーンはヘーラクレイトスの名をあげずに引用している。ゼーノーンが如何にヘーラクレイトスを受讀したかは、その断片を読んで知られるばかりでなく、師に最も忠實であるクレアンテースが解釋書をものしているところからも知られる。

(4) Sext. Ad. Math. X 218, SVF II 331. これら四つを非物體として認めたのは、懷疑主義の如き反對派の批評によつて、止むを得ずであつたらしい。

(5) SVF II 315

(6) *περὶ ποσότητος* D. L. VII 150

(7) 質料とウシアとが同じ意味に用いられてる場合が少くない。例えば萬物のウシアは第一質料である(D. L. VII 150)の如き。しかし第一質料もヒュポケイメノンも根本に於いてはアリストテレスの場合と異つて存在性を缺いているものではない。だから悪くいえば色々な概念をつつちやにしたといえるかも知れない。

(8) D. L. VII 156

(9) Heinrich und Marie Simon, *Die alte Stoa und ihr Naturbegriff* (Ein Beitrag zur Philosophiegeschichte des Hellenismus) S. 100 この書物はマルクス主義の立場から見ようとしてゐるので、ゼーノーンの「理想國」は革命を意圖したものであるが、後では既成の社會秩序に妥協したという。ストアの論理や自然概念神學その他に何かそういった階級的なものを見ようとしてゐる。それだけにまた問題ともなり得る。

(10) SVF II 413

(11) SVF II 413

(12) SVF II 442

(13) G. S. Kirk, *op. cit.* p. 329

(14) SVF I 563

(15) SVF II 441, 447

(16) SVF II 452

(17) SVF II 450

(18) SVF I 92, 145 II 463-473

(19) SVF II 476

(20) SVF I 92

(21) SVF II 465

- (22) SVF II 480, 479
- (23) SVF II 477, 473
- (24) SVF II 477
- (25) SVF II 468
- (26) SVF II 482
- (27) G. Rodier, *Études de Philosophie grecque* p. 260
- (28) *ibid.*
- (29) SVF II 492
- (30) *ibid.*
- (31) SVF II 499
- (32) *ibid.*
- (33) SVF II 503
- (34) SVF II 501
- (35) Sext. Ad. Math. X. 3
- (36) SVF II 504 *ἐπιτείναν ἀδελφάρους*
- (37) SVF II 505
- (38) SVF II 541
- (39) SVF II 535
- (40) SVF II 543
- (41) SVF II 505
- (42) SVF II 504, 505
- (43) SVF I 93
- (44) SVF II 509, 510
- (45) SVF II 511

- (46) SVF II 509
- (47) SVF II 518
- (48) SVF II 517
- (49) SVF II 1087
- (50) *ibid.*
- (51) SVF II 522, 523
- (52) D. L. VII 140
- (53) SVF II 633
- (54) SVF II 527
- (55) SVF II 526, 527, 528
- (56) *ibid.*
- (57) SVF II 528
- (58) *ibid.*
- (59) SVF II 531
- (60) SVF II 550
- (61) D. L. IX. 8 Diels, *Fragmente der Vorsokratiker* I 165, 5
- (62) SVF I 106
- (63) SVF II 605
- (64) SVF II 616
- (65) SVF II 598
- (66) *ibid.*
- (67) SVF II 602
- (68) SVF I 497
- (69) 「人文研究」第六卷第四號、第七卷第五號所載「運命というもの」

三

人間と雖も自然物である限り、動植物と共通な側面を持つていることは否定出来ない。氣候風土の影響も受けるし、また遺傳にも支配される。ポセイドーニオスは研究旅行をして、地理的諸條件がいかに人間の性格や文化形成の上に影響するかを調査した。また人間は他の動物と同様にホルメーを持つている。ホルメーとは生きる力、即ち生命力とか活力、意欲、衝動などといわれるものである。然るに生物の根源的なホルメーは「自己保存」⁽¹⁾とか、「自己愛」⁽²⁾というものであつて、自己に親しいもの、つまりその生存に寄與するものは、これを有益なもの、即ち善としてこれを求め、その反対のものは有害なもの、即ち惡としてこれを避ける。このようなホルメーは動物にも人間にもあるわけであるけれども、決して同じではない。例えば蜘蛛は上手に巣をつくる。しかしそれは生れつきであつて、教えられたものでも、技術によるものでもない。そのホルメーはどこ迄も「何か種族的なものを目的とする魂のいとなみ」⁽³⁾である。動物のその能力は種類としては完全でも、一面的であり、生活に必要なものに限られている。そこには個性的差別もなければ、進歩發展もない。例えば魚にしても昆虫にしても、それらには實に多くの種類がある代りに個性がない。彼らには彼らの働きの現れとしてそれぞれ道具や武器があるわけであるが、それらはその種類に於いては實に精巧で洵にうまく出来てるとはいえ、全く一面的で、ただそれ一方に限られて居り、全然融通がきかない。それに較べるとき人間の場合は、形は大して異ならないが、個性と來ては洵に種々雑多であり、推測し難いものがある。そして人間の活動は直接生活に關係あるものに限らない。人間のホルメーは「何か將來のものを目的とするディアノイアのいとなみ」⁽⁴⁾で、それは十分なる意識を以つて反省し、本當に有益かどうかをよく考へて選擇する。だから善惡も確實だということになる。故に人間のホルメーは非常に廣く、目的とか計畫とか準備、選擇、意志などが含まれる。つ

まり人間のホルメーは單なるホルメーではなくして、動物にないロゴスを持つてゐるのである。ロゴスは元來質料を貫いてゐるものであるから、一切は宇宙的ロゴスから形成されたものとして、それぞれの程度に應じてロゴ斯的だといわねばならぬであらうが、眞の意味に於いてロゴスを持ち、宇宙的ロゴスの分身としてロゴスを宿すものは人間あるだけである。プシュケーやヘーゲモニコン、從つて或度の知性は動物にもあるとはいへ、ディアノイアやヌースと同じ意味のロゴスはない。

ストアに於ける諸能力について見るに、プシュケーは動物にも共通のもので最も廣く、ストアでは普通それに八つの部分を區別してゐる。五つの感覺と言語的なもの、生殖的なもの、それからヘーゲモニコンである。このうちヘーゲモニコンは魂の中で最も高度のもので、或場合にはディアノエティコンともいわれる。單に指導的なものとしては他の動物にも用いられるが、人間に於いてはすぐれた能力は一應これによつて總括されて居り、認識論では知性、道德に於いては良心とか意志とも考えられる。しかしヘーゲモニコンが他の七つのものとはばらばらにあるのではなく、常にそれらと關係してゐる。つまりヘーゲモニコンは眼を通して見、耳を通して聽くわけで、それは蛸の足の如く肉體に擴つてゐるのである。つまり視とはヘーゲモニコンから耳に擴つてゐるブネウマであり、聽とはヘーゲモニコンから耳に擴つてゐるブネウマで、他の感覺も同様である。或はまた蜘蛛に擬せられる。「丁度蜘蛛が網の眞中において總ての糸の端を足で保持して居り、何か獲物がどこからかひつかかると、近くから感ずるように、ヘーゲモニコンは心臓の眞中に位して、近くから何か知らせを受けるとそれを吟味するように出來てゐるのである」⁽⁸⁾。それで同じ能力が眼に於いては視であり、耳に於いては聽であるのであつて、更にそれは「或處では理性であり、或處では感覺である」⁽⁹⁾のである。ヘーゲモニコンは魂の中の最もすぐれた部分であるから、それは屢々ディアノイアと同じ意味であつたり、ヌースと同じものと考えられたりしてゐる。またディアノイアとヌースも同じ意味に用いられてゐる箇所がある⁽¹⁰⁾。しかし更に限定すればディアノイアはヘーゲモニコンの一部であり、その主要なものであるし、またヌースもしくは

狹義のロゴスはディアノイアより更に上のものといえよう。しかし理性とディアノイアとの間には、プラトーンやプロタゴラスに於ける程、はつきりした區別があるわけではなく、ストアではディアノイア的な活動はロゴスの活動と考えられていたようである。しかし認識論に於いて感性に對する知性はいつもディアノイアの働きとされている。つまりディアノイアは外部からの感覺的心像に加工して、カテゴリー的の心像として所謂認識を形成する、即ち感覺的心像が外部の存在から來たものであり、しかもある通りのものであるならば、よしとして「承認」を與えるが、然らざる場合には認めないわけである。その外ディアノイアは自ら心像を産み出しするのである。かくて判断や推論、廣くいつて認識はディアノイア的能力によるということが出来る。ところでディアノイアに於ける大切な働きである「承認」には、既に自由というべきものが見られるのである。他の動物は外部からそのかす心像が現れるならば、直ぐ活動するわけであるが、人間に於いては直ぐは動かない。それをうけがうか、うけがわなないかが先で、よしとしてうけがえは認識となり、然らざれば退けられる。そしてこの承認を経て、始めて實踐へと踏み出すことになるのである。かくてシュンカタシスには一種の自由ト・エフ・ヘーミシが認められる。更に進んでは判断にも一種の自由が認められるかも知れない。といつても判断とシュンカタシスが同一だということではない。承認が單にうけがうのに對して、判断はその反對である否定の場合をも含むからである。それはとにかくとして眞をうけがうのを誰も妨げることは出来ないし、また偽を受入れるように何人も強要することは出来ない。そこには妨げられも強いられもしない自由意志があるわけである。また他に雷同したり、ドクサの段階にとどまつたりせず、自主的にはつきり判断することは既に自由に立つてゐるのである。エピクテトスは意見やホルメーや欲望や忌避をわれわれの權内にあつて左右し得るもの、つまり自由なものとして見ている。⁽¹⁴⁾ホルメーとは魂のいとなみであり、しかも「何かを目的とし、もしくは何かから遠ざかる魂のいとなみ」⁽¹⁵⁾である。クリュシッポスはホルメーやパトスも判断であると見ているが、「理性的なホルメー」ならば、無條件に「或る行爲を目的とするディアノイアのいとなみ」⁽¹⁶⁾なのである。とにかくストアでは「ホルメーや

シュンカタテシスの中に自由がある⁽¹⁷⁾と見てゐる。そして「シュンカタテシスなき心像は實踐的なホルメーを成立させない⁽¹⁸⁾」というのである。ところでわれわれはディアノイアに於いて、もう一つの自由があるのではないかと思う。それは今日でいう技術的なものに於ける自由である。他の動物に於いては外部の刺激によつて、例えば蜘蛛なら網を張るわけであるが、前に述べた如くそれは技術によるものではなく、科學によるものでも教育によるものでもない。しかし人間に於いては「承認なき心像は實踐的なホルメーを成立させない⁽¹⁹⁾」(前出)のである。心像が現われても、うけがわなければ、ホルメーとして實踐に迄動き出すことがないわけである。「技術」はギリシアでは今日の意味のと同じものではなく、寧ろ理論的なものをも含む廣いものである。ゼーノーンは技術を定義して、「技術とは、何かに人生に於ける有益なことを目的として、訓練された認識からなる體系である⁽¹⁹⁾」といつてゐる。この中には第一番に何か人生に役立つことが、第二番には訓練されたということ、第三番には認識からなる體系ということが語られてゐる。最初のことでは廣い意味に於いてではあるが何か有益なことが語られてゐるかと思う。次にはそのために訓練され習熟することとすることが、そして第三にはそれは認識から組織されたものであることが語られてゐる。それは單なる意見とか臆測とか、張つたりの如きものではなくして、どこ迄も學問、カタレープシスのな認識による學問を土臺にして、人生に役立つように訓練したものということが出来るかと思う。しかしその技術は今日われわれの意味するものよりも意味が廣い。つまり技術の若干のもの、例えば幾何學、天文學などは、理論的であつて實踐的でない、だが若干のもの、例えば大工や鑄造やおよそ手工業といわれるものは、實踐的であつて理論的でないからである⁽²⁰⁾。更に第三に「徳」も技術に屬するが、それは同時に理論的でもあり、實踐的でもある。何故それが理論的であるかといえ、それがその徳を達成するには、哲學の三つの部分、論理學、自然學、倫理學を通じてでなければならぬからであり、また何故實踐的であるかといえ、總ての實踐もそうであるが、徳は人生の技術であるからである⁽²¹⁾。今日の意味の技術は上述のうちの第二の部類に當るわけであらうが、この狹義の技術はしかし科學が今日の如く進歩してい

なかつたと同様に、今日の如く目ざましいものではなかつた。だからといつて餘り低く見ることも出来ないようである。ダンネマンの研究によれば、建築や工学、つまり橋梁架設、船舶建造、水道建設、軍事などはローマ人に於いては純粹の職人の域を脱していたというのであるし、また數學、光學、天文學、歴史、法律の豫備知識を前提とするものであつたといわれる⁽²³⁾。またポセイドーニオスがスペインの方を旅した時、岩に十文字に、また斜に掘つた坑道、特に坑道の中の水を汲み出す機械には驚いたということである⁽²⁴⁾。しかしまた今日の意味の技術をこの時代に持ち込むことはつしまねばならぬ。例えばキケロはストア派のバルブスに話させているが、そこでは神に與えられた人間の手の巧妙なことを讃えるために、或は人爲も單なる自然の模倣であるかの如く述べてるからである。バルブスによれば人間の手の指は屈伸自在にして書いたり、彫つたり、織つたり、縫つたり、その他銅鐵で色々なものをつくつたり、考え出したものを感覺的なものにしたたり、家や寺院をつくつたり、また色々な食物を手でつくつたりする。田畑の產物、狩獵、また養育による禽魚類も手によるし、また色々な用途に用いるために獸を馴らし、地中からは鑛物を採つて色々役立てるし、また樹木は切つて色々に用い、小にしては薪炭、大にしては船舶をつくる。また航海學の御蔭で自然の暴力を適度にすることも出来る。かくて山野の果物も、湖沼も河川もわれわれのものであり、穀物は蒔き、樹は植え、土地は肥えしめ、河は堤防で限つたり、眞直にしたり、方向を轉換させたりすることも出来る。かくてわれわれは「われわれの手で」(nostri manibus) 自然の中にいわば「別種の自然を」(alteram naturam) つくつてゐるというのである⁽²⁵⁾。これは正に自然に人工を加えて、第二の自然をつくつてゐるのである。しかも「われわれの手で」という如く、手によつてであり、動力の手段を使用しても、單に手の延長としての道具であつたらしく思われる。それにしても自然を模倣するだけでなく、學問を利用して自然がなすことの出来ぬものをなし遂げる一種の自由を得ていたということが出来る。技術は自然を學び、自然を模倣することから始まるのである。「自然を學んで無數の技術を發見した。というのは理性は巧みに自然を模倣して、生活に必要なものを獲得したからである⁽²⁶⁾」とい

われる所以である。第三の自由は徳に於けるものである。それは廣義の技術の一種として理論と實踐とを兼ねた典型的なものであろうが、これは一層高き知性と結びついている。それは分別的なデアノイアよりもロゴスやヌースにより多く基づいているように思われる。ロゴスといつても色々の意味があるわけで、言葉とか言論とか結論とか理法とか理性とかがそれである。しかし根本は宇宙のロゴスに基づいているのであつて、宇宙のロゴスは一なるロゴスであり、神とも運命とも掘理とも自然ともいわれるものである。人間のロゴスはそのロゴスの分身であり、被造物の中では「人間にのみ理性がある」⁽²⁷⁾のであり、「死すべきものの中で人間のみが理性を使用している」⁽²⁸⁾のである。それ以外の動物がプシュケーに従つて活動するとするならば、ロゴス的な動物はロゴスに従つて活動するといふことが出来る⁽²⁹⁾。しかしロゴスも、それは最もすぐれたものではあるが、魂の部分の活動であるに違ひはない。ヘーゲモニコンが魂の中の最もすぐれたものであり、デアノイアがヘーゲモニコンのうちのすぐれたものである如く、ロゴスはデアノイアのうちの最も程度の高いものといえるであらう。理性は魂の活動ではあるけれども、「何か觀念や先取觀念の集合」⁽³⁰⁾ともいわれる。それは白紙の如きヘーゲモニコンの中へ感覺や經驗によつて色々の觀念をつんで、欲望や意欲を監督し支配する能力である。それは故に「意欲の技術者」⁽³¹⁾つまり意欲を理性的に形づくるものである。それは宇宙に於いては質料の中にあつて質料を形づくる能働者、ラチオ・ファキエンス⁽³²⁾であると同様、欲望であらうと意欲であらうと、それら總てを統一し支配する能働者でなければならぬ。それはわれわれに行動するようにすすめる。しかし理性のこのような自由も承認が土臺になつてゐる。何も承認しない人には自由はない。承認というのは認識論的なものであるけれども、人間の自由にとつて極めて大切なものである。それから選擇へ進み、實踐に移り行くからである。自由とはわれわれの權内にあるということの意味する。われわれの權内にあるとは、われわれに許されてゐるということであり、われわれの權内にないとは妨げられてゐるということである。何がそれに屬するかを知つて始めて自由となり、選擇の立場に立つことが出来る。だから「許されてゐるものと妨げられてゐるものについての知識を自由

といわねばならぬ。だが許されてるものと然らざるものについての無知は奴隷でなければならぬ⁽³³⁾といわれるのである。しかし單なる知識では徳の實踐にはならない。故に自由は *ἐλευθερία* ともいわれるのである。エピクテートスは非常に屢々自由を *ἐλευθερία* といっている。自由意志がなければ、人間は考えられない。それで人間の本質はロゴスであるといわれる如く、また自由意志であるともいわれるのである⁽³⁴⁾。しかしそれは人間を實踐面から見ることになるわけであるが、人間が動物と異なるところは自由に理性的に自己限定する力、即ち意志にあるのである。しかもプロアイレシスとは *προ-αἰρέσις* であつて、*αἰρέσις* *πρὸ αἰρέσεως* といわれる⁽³⁵⁾。エピクテートスは外部がどうあろうとも、それらによつて左右されず邪魔されない自由が人間の本質であると考えた。このような自由が認められて、始めて眞の道徳が成立つのである。それで「もし何物もわれわれの權内にならないならば、どこに徳があるだろうか⁽³⁶⁾」というのである。また理性は美醜を判斷するものでもある⁽³⁷⁾。しかしロゴスはストアでは更に神でもある。前に述べた如く自然、運命、攝理、理性、神等は皆同一のものであるから、それは當然であるけれども、その分身たるわれわれの理性も、或意味に於いて同格でなければならぬ。それでゼーノーンは神々に祭壇をつくつてはならないといい、寧ろ理性の中にのみ神的なものがあるとし、「却つて理性を神と^{ἑαυτοῦ}思うべきだ⁽³⁸⁾」といっているのである。(未完)

(1) SVF III 178

(2) a se diligendo SVF III 182

(3) SVF III 169

(4) *ibid.*

(5) 動物に或度の知性があることを色々あげている。これはストアの者が直接觀察したものか、他の専門家のものを引合ひに出したのか分らない。一、二例をあげると、獲物を追つかけて墓石のところへ來た時、どちらに行くべきかを考えるかのやうに暫く立止つた犬が、右にも左にも足跡のないのを發見すると、墓石を越えて走るといつたようなこと(SVF II 726)。また或種の貝が或種の蟹と共同し、開いてる口に小魚がは入ると、蟹は貝に口を閉じるやうに合圖し、かくてつかまえた魚と一緒に食うという仕方(SVF II 729a)や、また蟻の死骸を引きずつて來た蟻が他の蟻と話合ひをし、二三度往復した後運んで來

た白いものと引換えに去つて行くといつたしぐさなどである(SVF I 515)。

(6) SVF II 879 しかし動物の場合にはパンタステイコンとホルメーティコンとの二つの働きだけで、シュンカタテイコンはなう。

- (7) SVF II 836
- (8) SVF II 879
- (9) SVF II 849
- (10) SVF III 306, 459
- (11) Sext. Ad. Math. VII 307
- (12) SVF II 981
- (13) Epict. Diss. I 17 23
- (14) Epict. Ench. I
- (15) SVF III 377
- (16) SVF III 169
- (17) SVF II 981
- (18) SVF III 177
- (19) SVF I 72 II 93
- (20) SVF III 202
- (21) *ibid.*
- (22) 大自然科学史第一卷三三七頁
- (23) *ibid.*
- (24) Pohlenz, Die Stoa S. 210
- (25) Cicero, N. D. II 152
- (26) Cicero, De Legibus I 26
- (27) SVF II 1012

- (28) SVF II 879
- (29) SVF III 462
- (30) SVF II 841
- (31) D. L. VII 86
- (32) SVF II 346a
- (33) SVF III 356
- (34) Epict. Diss. III. 1, 40, IV. 5, 12, II. 22, 19
- (35) SVF III 173
- (36) SVF II 115
- (37) SVF II 988
- (38) SVF I 146

(筆者 大阪市立大學文學部〔古代哲學史〕教授)